

小金井キャンパスの外壁意匠計画

平成26年3月 施設課

1. 小金井キャンパスの建物の歴史

昭和24年 旧師範学校6校を統合し、東京学芸大学は設立された。当初は6つの分校でスタートし、第1回入学式は世田谷分校(旧東京第1師範学校)講堂で行われた。現存する東京学芸大学の建物で最も古いのは世田谷高校の校舎本館(昭和10年築)である。その後、昭和39年ごろまでに大学機能を小金井キャンパスに統合した。

小金井キャンパスは東京第2師範学校が戦災で引き移ったところで、昭和29年に最初のコンクリート建築が着工されその後 昭和55年頃まで新築は続き、現在のコンクリート建築群が形成された。平成8年の航空写真及び外壁未改修の建物から推察すると、この頃の外壁はベージュ色又は白色でほぼ統一されている。一部の建物は部分的にコンクリート打ち放し、茶色が使われている。

平成初期の新築・改修建物はグレー系で統一されている。一部の建物は部分的に茶系。

平成20年以降の新築・改修建物はベージュ+木目のコミュニティセンター、木目の弓道場、茶色の保育園、黄色+グレーの第1むさしのホールと、暖色系。

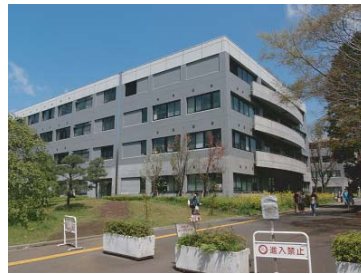
キャンパスの建物は、昭和期のベージュ色 → 平成初期のグレー色 → 平成20年以降の茶色等と時代毎に大別できる。



世田谷高校本館 S10築 ベージュ色



小金井 S55以前築 ベージュ色



小金井 平成初期築 グレー色

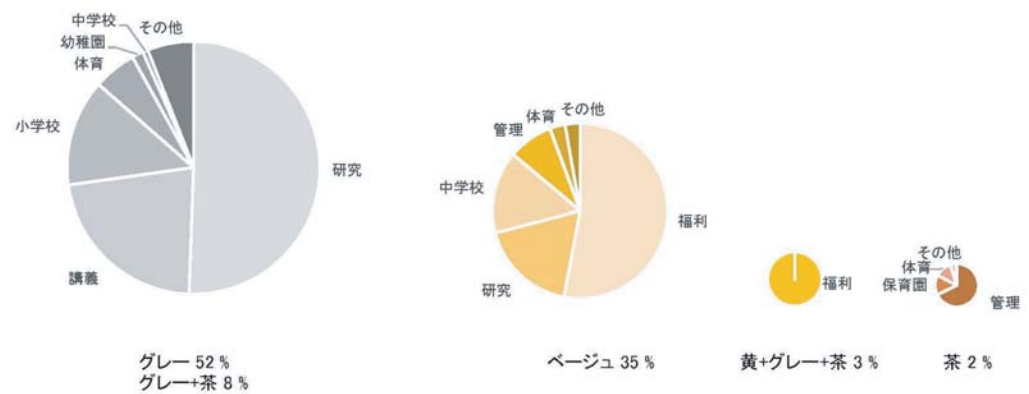


小金井 H20以降築 茶色等

2. 現在の小金井キャンパスについての考察

外壁色を大別すると、グレー52%、グレー+茶系8%、ベージュ35%、黄+グレー+茶3%、茶2%。それぞれの用途別内訳は右記グラフの通り。

キャンパスを全体的に見ると外壁色に共通性がないため、建物群としての景観、つながりに問題がある。また、キャンパスの特徴として緑地面積が広く大木が多い。構内道路ごとに街路樹を統一しており、緑地の景観がよい。またキャンパスの緑地は「学芸の森」として近年の環境教育、屋外教育の場として活用されている。建物外壁色に共通性があれば景観は今よりずっと良くなり緑地の魅力も増す。



3. これからの小金井キャンパス計画

東京学芸大学は教員養成の基幹大学であり、附属幼・小・中学校がある。グレーのみだと暗く、暖かみに欠けるため幼・小・中学校、教育系大学にはやや不向きだと思われる。さらにキャンパスの大木が建物に陰を落とす為グレーが陰に見える場所も多い。本学では児童の発育相談や大学生のメンタル相談も行っている。明るさ、暖かみが求められる。

昭和のベージュは学芸大学設立当初のイメージ通りであり、小金井キャンパスの緑豊かな環境においても暗くならない。

これからの新築・改修建物の外壁色は主にグレーとベージュ両方で構成し、部分的に茶や白等を取り入れることは可とする。

それにより既存建物のグレー色、ベージュ色、茶色等と緩やかに景観がつながる。暖かみ・落ち着き・新しさを感じられるキャンパスを目指す。

グレーとベージュで構成された外装例



明治大学中野キャンパス



神戸市灘中学校高等学校



リゾナーレ八ヶ岳